

動画シンボルの意味明瞭度に関する調査

- 日本版 PIC における静止画シンボルとの比較 -

北神 慎司 ・ 室井みや

(島根大学法文学部 ・ 日本大学文理学部)

【 目的 】

AAC(補助代替コミュニケーション) の試みとして、具体的な事物を表すピクトグラムや、比較的抽象性の高い動詞、形容詞、前置詞などを表すイデオグラムなどの、いわゆる視覚シンボルを用いたコミュニケーションがある。その一つに、日本版 PIC (Pictogram Ideogram Communication) が挙げられ、例えば、知的障害を持つ人たちや失語症患者にとって、有効なコミュニケーション手段であることが、複数報告されている。

しかしながら、特に、イデオグラムについては、シンボルとして描かれているものと、それが表す意味内容との形態的な関係が、恣意的であることから、シンボルによって、意味のわかりやすさに差が見られることが北神・清水・井上 (2001) によって示されている。そこで、本研究では、林 (2002) によって開発された 100 語の動詞に対応する動画シンボルについて、アニメーション化されることで、その意味のわかりやすさ (意味明瞭度) が Figure 1 に示されているような、従来の静止画のシンボルと比較して、どのように異なるのかを検討する。



干す



捕らえる

Figure 1 イデオグラムの例

【 方法 】

調査対象者とデザイン： 大学生および大学院生 18 名。リスト (A / B) × シンボル (静止画 / 動画) の 2 要因計画。前者のみ被験者間要因。

材料： 100 語の動詞に対応する静止画シンボル 100 個と動画シンボル 100 個。静止画シンボルについては、基本的に、現行の日本版 PIC で使われているものと同じであるが、動画シンボルとの対応の関係で、一部改変した。静止画、動画とも、2 つのセット (1 / 2) に分割し、重複のないように、静止画と動画のセットを組み合わせ、計 100 個からなる 2 つのリスト (A / B) を構成した。

手続き： 調査はすべて個別により行われた。まず、モニター中央に、ある言葉が 1.5 秒提示され、続いて、

それに対応する静止画もしくは動画のシンボルが一定の秒数提示された。なお、提示時間 (コマ数) は、シンボルによって異なり、静止画のシンボルは、同じ概念を表す動画シンボルの提示時間と同一とした。その後、画面には、意味明瞭度と日常重要度 (日常のコミュニケーションを行う上で、その概念がどのくらい重要か) について、7 段階で判断するように求める教示文が提示され、調査対象者は、キーボードのテンキーを入力することで判断することが求められた。調査では、この手順が繰り返されたが、静止画と動画の提示順はランダムであり、かつ、意味明瞭度と日常重要度の反応の順番は、カウンターバランスされた。

【 結果と考察 】

シンボルのセットごとに、静止画と動画の意味明瞭度の平均値を Table 1 に示した。セット 1, 2 それぞれについて、*t* 検定を行ったところ、どちらにおいても、動画シンボルのほうが、静止画シンボルに比べて、有意に意味明瞭度が高いことが示された (それぞれ、 $t(16)=5.34, p<.01$; $t(16)=7.80, p<.01$)。つまり、全体としては、同じ概念をシンボルとして表す際に、動画の形式にするほうが、意味内容が理解されやすいことが示唆された。

Table 1 意味明瞭度の平均値 (カッコ内は SD)

	静止画	動画
セット 1	3.73 (0.66)	5.30 (0.41)
セット 2	3.85 (0.37)	5.31 (0.58)
合計	3.78 (0.54)	5.30 (0.48)

次に、シンボルごとに、静止画と動画の意味明瞭度を比較し、その結果を Table 2 のように整理した。表に示されているように、静止画の形式のほうが意味明瞭度が高いものは、検定の結果 (基準は、5% 水準) から、一つもなかった。つまり、シンボルごとに比較しても、シンボルによって静止画のほうがわかりやすいという可能性は低いと考えられる。

Table 2 シンボルごとの意味明瞭度の比較

	静止画 < 動画	静止画 = 動画	静止画 > 動画
度数	54	46	0

本研究の材料は、林文博先生 (オフィス・スローライフ) から提供されたものです。記して感謝いたします。